

巨樹ウルシと縄文時代の漆文化に馳せる

はじめに

私が、昨年（令和3年）輪島市門前町栃木（とちのき）集落の石倉神社を訪ねた際、神社の登り口で大きなウルシの話聞き、地元の方にその場所に案内していただくと、小面積ではあったが辺りがきれいに下草刈りされ、ほぼ平らな場所に大きなウルシが2本並んで直立しており、片側の木は大木であった。

そして、少し離れたところにもう一本のウルシがアテ（ヒノキアスナロ）の林下に見られ、計3本のウルシがあったが、この日は夕方であり、測定は行わなかった。



林立しているウルシ

すでに「石川県の巨樹」（里見信生・鈴木三男、1982）には、加賀市山中温泉杉水町の「石川県県民の森」に、樹高17.0m、胸高幹周17mのウルシが記述されている。

2 栃木のウルシ

栃木集落は、八ヶ川にそそぐ栃木川の中流域の峡谷に位置しており、

1509年（永正6年）の畠山義元寺領安堵状（石川県の地名、1991）に「栃木」の名称が記載されている。歴史ある古い集落であるが、トチノキとの関連は不明である。令和4年7月に、巨樹ウルシを測定するために栃木へ出かけた。

環境省の巨樹の測り方に従い、立地がやや斜面なので山側から地表1.3mの高さで幹周204cm、樹高18mを測定した。地上1.3m上部から一本の幹が出ているが既に枯死しており、樹皮にはノキシノブ、キノコ（サルノコシカケの様）が着生していたが、上部の枝には緑色の若い果実が付いていた。通常は樹高10m余りと植物図鑑に記載されているので樹高からしても、このウルシは本県では巨樹であると思われる。

なお、巨樹の定義の中に幹周り3m以上に育ちにくい樹種（ツバキ、マユミなど）については、3m未満でも調査対象としているとの



緑の若い果実をつけているウルシ

ことからウルシもこの例に従ったところである。

ウルシは落葉高木で雌雄異株であり、葉は奇数羽状複葉で9〜15枚の小葉からなり、小葉は全縁で鋸歯はなく、表面は無毛で裏面は脈上に荒い毛がある。葉柄には短い軟毛が生え、6月には葉柄から長さ10〜25cmの円錐花序を伸ばし、多数の小さい花をつける。

このウルシの樹皮に横方向に線刻状に傷をつけると、乳白色の樹液が滲み出してくる。これが漆である。縄文時代早期から利用していたことが明らかになっている。漆は数千年を経ても良好な状態で美しい光沢を保っている（四柳嘉章、2009）。

なお、ウルシ科ウルシ属にはツタウルシ、ハゼノキ、ヤマハゼ、ヤマウルシの樹種があるが、いずれも県内に広く分布している。

3 縄文時代の漆文化

私たちの身の周りには美しい漆器は、いつ頃からつくられていたのだろうか。正直なところ、あまり考えたことがなかった。

1984年に福井県若狭町の鳥浜貝塚遺跡から、椀・皿・鉢などの漆器の木胎容器、弓・太刀などの武器、櫛・腕輪・耳飾り・首飾りなどの装身具が、多岐にわたり漆に施された出土品が発掘された。この縄文時代

の漆文化の発見には驚いたが、さらに出土した木片を2011年に東北大学が調査したところ、およそ1万2600年前のウルシであると同定された。



この事は、漆塗櫛（鳥浜貝塚発掘品）の国や他の地域から持ち込まれた

のではなく、日本国内に元々自生していたのではないかという可能性も考えられるもので、植物に関心の高い人々には驚きであった。

本県でも、縄文時代の七尾市三引遺跡（約7000〜6500年前）から赤色漆塗堅櫛、金沢市の米泉遺跡（縄文後期〜晩期）からも漆を用いた腕輪、能登町の真脇遺跡などからも漆器が出土している。

このように新たに考えてみると、少なくとも9000年前の縄文時代早期には、漆の利用が開始されていることが分かってきた。今のところ世界最古である（四柳嘉章、2009）。

つまり、縄文時代の人々の生活は意外と活発に野外に出て活動し、漆器を使って食事をし、漆の装飾品を身に付けるなどの優雅さが想像される。比較して羨ましさを感じている。

（石川県巨樹の会 高木政喜）